主体的な学び方ができる漢字学習とは

漢字学習は反復ではなく考えて・活用する学び方へ

漢字は繰り返し書いて覚えるのではなく「考えて使える」学び方へという、新しいコンセプトのもと、明星大学教授（元筑波大学附属小学校教諭）の白石範孝氏らが企画・監修した漢字学習帳「漢字のとびら」は、発刊から5年目を迎えた。問題解決に向き合う力を育てながら語彙を増やしていく、これまでの漢字教材にない効果が期待できると、多くの学校で活用されている。今年度採択した2校を訪ねた。

自学自習を促し定着を図る漢字学習

東京・清瀬市立清瀬第三小学校

語彙力育成は学力の土台

清瀬市立清瀬第三小学校（水野恵美子校長、児童数270）は「よく考えやり抜く子ども、やさしく思いやりのある子ども、明るく元気な子ども」を教育目標に、「自分の思いや考えをもち　書くことができる子」を今年度の研究主題に据える。書くことはすべての教科で生かされる力だが、語彙力が十分でないために、せっかく獲得した知識が活用できない、考えがあっても伝えられないのはもったいない。そこで語彙力育成の一つの手段として「漢字のとびら」を導入することにした。

「漢字のとびら」の見本を取り寄せた第一印象は、シンプルですっきりしているのが、本校の子どもに合っていると感じました。イラストなどが多いと情報過多でかえって集中できない。大切なポイントに焦点を絞って示した構成は、支援の必要な子どもにも相性がいいのではと使ってみることにした。

三小メソッドで家庭学習と連携

実際に指導していくうちに、シンプルさは理解しやすさにつながるが、子どもによっては物足りない、教師側ももう少し教えたい、と「もの足りない部分」が出てきそうだった。そこで、プラスアルファの学習は子どもが自習できるよう「三小メソッド」を次のように編み出した。

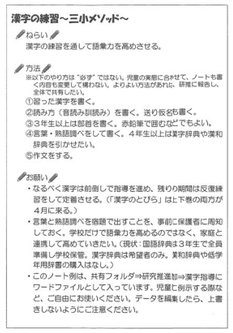
①習った漢字を書く、②読み方（音読み訓読み）を書く。③3年生以上は部首を書く。赤鉛筆で囲むなどでもよい。④言葉・熟語調べをして書く。4年生以上は漢字辞典や漢和辞典を引かせたい。⑤作文をする。

このうち、④の言葉と熟語調べを宿題として出すことを事前に保護者に周知し、家庭との連携で語彙力向上を目指すことにした。

確実な定着を図るため、教科書の進度より前倒しで進め、1年間で「漢字のとびら」の上下巻を3回繰り返す。「漢字のとびら」は単元ごとに▽新出漢字のポイントを意識させる▽読み・書きの練習で定着させる▽「送りがな名人」「書き名人」など考えながら覚えるの3つのステップで構成されるが、それを縦割りにして1学期には上下巻で新出漢字のポイントを終えた。2巡目に読み・書き練習、3学期は考えながら覚える3巡目に入っている。

「『漢字のとびら』は上下巻の両方が4月に届くため、柔軟な使い方が可能」と、3年生を担任する研究主任の三浦沙貴教諭は話す。

学習活動の様子



漢字の練習～三小メソッド～

ねらい
漢字の練習を通して語彙力を高めさせる。

方法
※以下のやり方は“必ず”ではない。児童の実態に合わせて、ノートも書く内容も変更して構わない。よりよい方法があれば、研究に報告し、全体で共有したい。
①習った漢字を書く。
②読み方（音読み訓読み）を書く。送り仮名も書く。
③3年生以上は部首を書く。赤鉛筆で囲むなどでもよい。
④言葉・熟語調べをして書く。4年生以上は漢字辞典や漢和辞典を引かせたい。
⑤作文をする。

お願い
・なるべく漢字は前倒しで指導を進め、残りの期間は反復練習をして定着させる。（「漢字のとびら」は上下巻の両方が4月に来る。）
・言葉と熟語調べを宿題で出すことも、事前に保護者に周知しておく。学校だけで語彙力を高めるのではなく、家庭と連携して高めていきたい。（現状：国語辞典は3年生で全員準備し学校保管。漢字辞典は希望者のみ。某和辞典や低学年用辞書の購入はなし。）
・このノート例は、共有フォルダ⇒研究推進部⇒漢字指導にワードファイルとして入っています。児童に例示する際など、ご自由にお使いください。データを編集したら、上書きしないようにご注意ください。

「三小メソッド」

どの担任も教えやすい

「漢字のとびら」を使い始めて、子どもと学級担任の双方に次のような変容が見られた。まず、子どもたちが自然と国語辞典を引くようになった。3年生以上は全員準備して学校に保管し、漢字辞典は希望者のみとしている。引き方の指導は特にしていないが、「漢字のとびら」で学習した字を使った言葉や熟語を発見する力が付いた。

学年が上がると子どもたちは筆順をペアでチェックしながら書くなど、自分たちでも使い方を工夫しはじめた。前倒しで進めるため、その学年の漢字検定が受けられ学習意欲の向上にもつながっている。三浦教諭も子どもたちの語彙が少しずつ豊かになっている感触があるという。

担任も漢字を教えやすくなった。「それぞれの先生はしっかり漢字を指導したいと思っていても、初めて担当する学年だとその勘所がわからない。『漢字のとびら』には子どもたちが間違えやすい漢字が示されているので、教えやすい」と三浦教諭。宿題のノートの書き方は、三浦教諭がサンプルを作成しPDFデータ化して共有フォルダにアップロードしてある。全担任が自由に使えるようにしたのも好評だった。

今後は、「漢字のとびら」を活用した「三小メソッド」がどのように子どもの語彙力や表現力、思考力などに好影響を与えたかを検証するのが課題だという。子どもたちが自信を持って書き、考える楽しさや、知る喜び、解決する面白さを味わえるよう、指導の改善を続けていく予定だ。

右から水野恵美子校長、三浦沙貴教諭

「学びに向かう力」を引き出す漢字学習

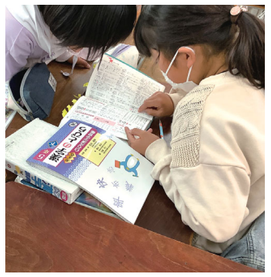
兵庫・西脇市立桜丘小学校

理論ある教え方が魅力

西脇市立桜丘小学校（前田正樹校長、児童数689）は「ふれあい　学びあい　支えあい～ひとりひとりのきらめく明日のために～」を教育目標とし、今年度は主体的に学ぶ児童、高め合う学習集団を育てることを目指す。

同校では校区内の高齢者を学校に招いて敬老する「尚歯会」が10年以上も続く。全校縦割りの「チェリー班活動」など異年齢との関わりも大切にしてきた。授業においても、学習の見通しや振り返りの活動、学びを高め合う活動を取り入れることを重点事項の一つに置いている。

そんな同校が「漢字のとびら」を使い始めたきっかけは、前田校長が15年以上前に著者の白石範孝氏に出会ったところまでさかのぼる。当時の筑波大学附属小での白石氏の国語の授業を参観し、影響を受けてきた「感覚や経験ではなく、理論や原理・原則のある授業にひかれ、授業改善へ多くの教示をいただいた」と前田校長は振り返る。漢字学習において「きまり」に着目した新たなドリルが発売されたと知り、全学級で導入することにした。



漢字を調べる習慣がついた

思い込みの間違いが明らかに

5年の藤原高史学級では、今、子どもたちは漢字の「きまり」を探す新しいドリルに夢中だ。「増」という字の「田」の部分の筆順はなぜ縦からなのか、なぜ横からではないのか、意見が分かれているようだ。「なんで？　なんで!?」と子どもたちは藤原教諭を問い詰める。そこで、藤原教諭は「きまり」がわかる漢字を例に挙げていく。「〝十〟は横から。じゃあ、〝チ〟の中の〝十〟は？」「横」「そう。基本はそうなんやけど、時々、横からじゃない順番の字があって、それが〝田〟なんよ」。

すると子どもたちは手を空で動かして「ほんまや」と気づいたようだ。何かの中で交わるときは縦が先」のルールを教科書からも見つけることができ、「増」でも同じく適用されると分かった。しかし、中には、「今までずっと〝田〟の中の〝十〟も横から書いていた」という子どもも。このやりとりで、子どもたちの間違えやすいロジックや、思い込みで間違ってきた筆順も発見できるのが「漢字のとびら」を使うメリットだ。

分かるまで調べる楽しさ

このように子どもたちは1つの漢字にもこだわり、納得するまで考えることをやめない。「織る」と送るのに、なぜ名詞の「織物」には「り」がつかないのか、「圧」の部首はなぜ「土」なのか、など着眼点は鋭い。藤原教諭が、漢字辞典やインターネットを使うとヒントが得られそうだと示唆すると、早速、子どもたちは教室のうしろから漢字辞典を取り出した。「葦」「基」など「土」は何かを覆う、固める、かぶせたりして土台にする、という由来を突き止めることができ、「圧」もその一つと解明できた。

湧き上がってくる疑問に対して、それぞれが自分の意見ややり方を披露し、教師のヒントを得ながら自分たちで解決していく。「漢字のとびら」を通して、子どもたちの探究心の本領が発揮された1時間だった。

「漢字学習は頭を使うところがなかった。だから好きじゃないし面白くない」という子どもたちの先入観が、「漢字のとびら」を使うことで、こだわって漢字を書く、楽しく考えられるようになったという。

漢字のきまりに着目させ、子どもたちの問いや類例を取り上げていくと、思わぬ方向に授業が展開する時もあるが、意外性があり、ともに学べて楽しいと話す藤原教諭。家庭学習の中で子どもたちは教科書の標準字体以外の字体を見つけたり、「西脇の織り物」などと慣用的に使われる送り仮名があることに気づく。それを「間違い」と断じるのではなく、なぜ許容されているのかを、漢字のきまりと比較して考えてみる、伝わることも大事だと気づく、それが「学びに向かう力」だと考えている。

右から前田正樹校長、藤原嵩史教諭

「考える」ことを大切にし、楽しく漢字を学ぶ。　白石式考える漢字学習帳　『漢字のとびら』

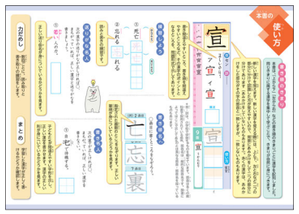
「きまりがみにつく漢字のとびら」
小学1～6年生：年間1冊／定価各850円（税込）

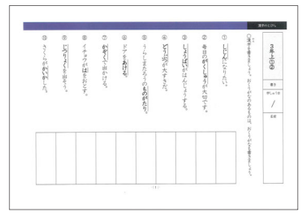
「漢字のとびら」
小学1～6年生：各上・下巻／定価各460円（税込）
※本教材は、光村図書の教科書「国語」を参考にして作成しています。

企画／監修・著
白石　範孝　明星大学教授（元筑波大学附属小学校 教諭）
『考える』楽しさを新しい漢字学習帳で
「国語は好きだけど漢字は嫌い」という声をよく耳にします。
漢字学習は、「お手本を見て繰り返し書いて覚える」という方法が一般的です。
しかし、漢字にはさまざまな「きまり」があります。漢字のきまりを理解し、活用することで繰り返し書かなくても漢字は正しく覚えられます。
「漢字のとびら」では、漢字のきまりを知り、書き順や間違えやすいところを児童に意識させてから書かせます。さらにひとつの漢字を見て、正しいか、正しくないかを自分で判断し、正しくなければどこが違うのかを、明確に指摘できるような問題を設けました。自分で「考える」学習、「考える」活動を大切にして、漢字を楽しく学べるようにしたいと願ってこの教材をつくりました。

著
青木　伸生
筑波大学附属小学校 教諭
漢字を通した「思考のプロセス」が身に付くと、子どもたちは正しく書けて他の漢字との共通点が見えてきます。漢字を見る目は考える力につながります。

著
白坂　洋一
筑波大学附属小学校 教諭
漢字のきまりを見つけ、知ることで漢字の学習はより容易になります。「わかった！」「そうか！」こんな声が、子どもたちから漢字の学習を通して聞こえてきそうです。





きまり、光村版上下巻の各学年に「定着確認テスト」と学習した漢字を実践で使う「漢字で作文」をご用意しています。
ご利用の際は専用のID／パスワードが必要です。

内容詳細につきましては、ご審査用見本をご覧ください。
ご請求は右記まで▶
お問い合わせ　TEL 03-3304-5314　FAX 03-3304-5010
WEB https://www.next-edu.or.jp
企画　特定非営利活動法人 次世代教育推進機構 for Education of Next Generation
発行・販売　KYO-IKU 教育開発出版株式会社